ふくはまの風

第３９号　　２０２２年3月１日

社会福祉法人　福浜会

人生のドアを開けるのは自分の意思でありたい

テレビを見たり、本を読んだり、ニュースや時の話題をインターネットで情報を得たりしている中で、自分に響いてくる言葉があります。これは誰にでも訪れるものですが、それをどう感じ取るかは、人によって差はあります。その時々の気持ちに左右し、毎日が楽しいと感じているときに、マイナスな気持ちになるような言葉は、さらっと通り抜けてしまうかもしれません。その逆に、悲しい気持ちになっているときに、明るさを伴う言葉は心に残らないかもしれません。

そういう意味では、今回テーマにした「人生の賞味期限」は、これまで障がいのある人と関わる仕事をしてきて今がある私にとっては、心の中にスーっと入ってきた言葉でした。

前書きが長くなりましたが、この言葉には次のような続きがありました。

「私は『挑戦はいつでも出来る』というのは事実でないと思ってます。人の持つ「エネルギー量」は一生を通して同じではないからです。個体差は確かにありますが、エネルギー量は必ず時間と共に減っていくし、お金のように貯蓄できる性質のものでもないです。「生きる」ということはこのエネルギーを消耗していくプロセスと言えます。知識や経験があっても、エネルギーが枯渇してしまっていてはもう何かに挑戦しようとは思えなくなってしまいます。この「何かに挑戦できるエネルギーがまだ残ってる期間」を「人生の賞味期限」と私は呼んでいます。」と。そして、「常に次のドアを開けるのは、本人の意思(意志)であることを思い知りました。」

この言葉のどこの何に私は感じるところがあったのか。この仕事に巡り合い、他の仕事もしてみたいと思った時期も何度かありつつ、結局ずっと利用者さんとともに過ごしてきて、それでもこの仕事の本筋やこの仕事の持つ重みや私がこの仕事をしてきた理由は、なんとなくしか分からない。人に語れるところには、まだたどり着けていないと感じています。だからこそ、以前から期限が切れる前に自分が歩いてきたことを整理しないといけないなと思う自分がありました。

「ドアを開けるのは本人の意思である」という言葉も、重みのあるものとして響いてきました。これは、自分自身のことだけでなく、利用者さん本人、そのご家族、そして職員にもつながると思いました。何気ない日常の風景の中で、まったりとのほほんと生きている自分を見たり、何かに追いかけられるように仕事をする自分を見たり、さまざまな自分と向き合っているなと振り返る瞬間があります。常にピリピリした緊張感の中で過ごしていたら、自分自身を振り返る“時”にすら出会うこともありません。

「天は音もなく静寂で、ただ蒼々と澄みわたっている　天はいったいどこにあるというのか
　高いところでも　遠いところでもない　　天は人の心の中にこそあるのだ」

「人生の賞味期限」って何だろう。本当にあるのかな？と思う自分もいます。それは自分自身の心が決めることなんだから、目の前にあって、自分でやってみたいことがあってそれをすることが自分らしい生き方なら、賞味期限は無いのかもしれない。難しくなく、あいまいなままでいい、ただ漠然とでいい、今の自分やこれからの自分を考えてみようかなと思う言葉でした。

（髙橋和）